
姉を慕い

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姉を慕い

【Nコード】

N8932P

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

死んでしまった姉のことを忘れられない正大。だが姉に書き写しの人と出会い。お姉さんによく似た人が好きになることはよくあるそうです。

第一章

姉を慕い

切通正大は今は一人だ。一重でありがやや四角さのある強い光を放つ目に一直線にやや上にあがった眉を持つている。顔は顎が少し前に出ていて顎の先は平になっている。茶色の髪の毛のその部分を短く刈っているのが特徴的だ。背は高く一八〇を超えている。唇が少し突き出た感じであるがひよつとことというものではなかった。そんな顔だ。

彼はかつて姉がいた。しかし去年交通事故で亡くなった。彼はまだその姉のことを考えているのだ。

「何で死んだんだろうな」

家族と一緒にいる時についてしまつたのだ。

「本当に」

「言っても仕方ないんじゃないか？」

「気持ちはわかるけれど」

両親はその彼にいつも言った。

「確かに、美千代のことには悲しいさ」

「私達もね」

自分の娘のことだ。そうでない筈がなかった。

「しかしそれでもな」

「美千代はもういないのよ」

「返って来ないんだ」

「わかつてるよ」

正大も一応こう言いはする。しかしだった。それでも言わずにはいられなかったのである。

「けれどさ」

「それでもか」

「今はなのね」

「どうしても忘れられないんだ」

辛い顔での言葉だった。

「まだ」

「仕方ないか。仲良かったからな」

「本当にね」

「いつも一緒だったから」

それを自分でも言う。

「だから今は」

「少しずつ落ち着いていくんだな」

「今はね」

二人はそんな息子を気遣いこう言うだけだった。彼は大学に通っていてもそんな有様だった。魂が抜けた様になってただいだけだった。

そんな彼にだ。友人達も気遣ってだ。あれこれと声をかけるのだった。

「なあ、いいか？」

「カラオケ行かないか？」

「それとも飲みに行くか？」

「いや、いいよ」

しかし彼は無気力な声で返すだけだった。

「それはさ」

「いいってよ」

「何言ってるんだよ」

「そうだよ、知ってるさ」

彼の事情はという意味だ。それはだというのだ。

「しかしそれでもな。やっぱりな」

「このままいてもどうしようもないだろ」

「だから明るく持てよ」

「少しずつな」

「うん」

正大も頷きはする。しかしであった。

彼は無気力なままだった。どうしてもその記憶を拭うことができなかった。

そのまま暫く時を過ごしていた。しかしであった。

その彼の前にだ。ある女性が姿を現したのだ。

たまたま入った本屋にである。背が高くすらりとした身体をしてである。髪をショートにして気の強そうなアーモンド形のやや吊り上がった目をしている。身体つきは中々均整が取れている。その彼女がズボンの上に店のエプロンを付けてだ。カウンターにいたのである。

正大はその彼女を見てだ。驚きの声をあげた。

「姉さん!?!」

彼女は姉に生き写しだったのだ。死んだその姉にだ。

それで思わず声をあげた。そうしてである。

「あの」

「はい?」

「貴女は」

「私ですか」

「はい、この店の人ですよね」

「はい、そうです」

こう答えてきた。

「そうですけれど」

「そうですか」

正大はそれを聞いてだ。まずは頷いた。

第二章

そしてだ。そのうえでまた声をかけた。

「それじゃあですけれど」

「はい、それじゃあ」

「またここに来ていいですか」

本を持ちながらの言葉だった。そうしてである。

彼はその本屋に毎日来た。そして彼の顔も少しずつ明るくなった。

このことにだ。両親も言う。

「何か明るくなったな」

「気を取り戻したの？」

「そうなのか？」

「そうかもね」

正大も少し笑ってこう返すのだった。

「ひょっとしたら」

「一体何があったんだ？」

「それで」

「何でもないよ」

今はこう言うだけの彼だった。

「別にね」

「何でもないのか」

「そうなの」

「そうだよ、何でもないよ」

しかしであった。正大は確かにその表情は明るくなっていた。そうしてである。

この日もその本屋に通う。最早それは日課になっていた。

そのうえでだ。その店員と話す。話をしているうちにお互いのことを知るのだった。

「切通正大さんですか」

「はい、そうです」

まずは彼の名前からだった。

「覚えてくれますか」

「はい、それで私の名前はですね」

「何ですか？」

「田部神名といます」

「田部さんですか」

「はい」

笑顔で彼に話すのだった。

「宜しく御願いたしますね」

「はい、それでは」

まずは名前からであった。そうしてだ。

二人は付き合いを深めていく。やがて店の外でも話をするようになった。街の中で話をしていた。その話が何かというところであった。

「そうですか。お姉さんですか」

「はい、いました」

姉のことも話すのだった。

「実はです」

「それでも今は」

「死にました」

ここぞだ。辛い顔になって話す。

「残念ですが」

「そういうことがあったんですね」

「けれど今は何とかこうして」

大丈夫だというのであった。

「安心して下さい」

「わかりました。では正大さん」

「はい」

自然とだ。名前で呼び合う仲にもなっていた。

「今は大丈夫ですね」

「何とか」

とはいってもだ。やはり辛い顔になっていた。
神名はそれを見逃さなかった。しかしあえて隠して頷いて言うの
であった。

「わかりました」

「今は落ち着いてます」

また言いはした。苦しい顔で。

「ですから安心して下さい」

「はい、それではですね」

「それでは？」

「今日はまだ時間がありますよね」

真面目な顔での問いだった。

「ですから」

「何処に行きますか？」

「正大さんの望まれるところで」

そこでいいというのだった。

第三章

「そこに行きましょう」

「それなら」

正大はそれを聞いてだ。神名をある場所に案内した。そこは洒落ていてそれでいて落ち着いた、店の内装に緑の草を使った店だった。そして店で扱っているのはだ。

「紅茶ですか」

「はい、ローズティーです」

それだというのである。

「様々なローズティーを出してくれるお店です」

「そうですね。そういえば」

店の中に暫くいてだ。神名はあることに気付いた。

まずは香りだった。間違えようもないまでにかぐわしいそれはだ。紛れもなくローズティーのものであった。

そしてもう一つ気付いたものがある。それはだ。店の中にいる客は結構多い。しかしそのどれもが女であった。男の客はだ。正大しかいなかったのである。

彼女が気付いたのはこの二つだった。その事に気付いたうえで自分の正面に座る正大のその言葉を聞くのであった。

「ここに来るのは」

「来るのは？」

「久し振りです」

こう神名に話すのである。

「本当に」

「そんなにですか」

「一年ちよつと来ていませんでした」

「一年ちよつとですか」

「前までは時々来ていました」

そしてだ。彼が言う言葉はだ。

「二人で」

「御二人で、ですか」

「紹介してもらってです」

正大は余程嬉しいのだろう。このことを聞かれもしないのに話す。見ればその顔も普段より機嫌のいいものであった。

「それでここに来ました」

「そうだったんですか」

「このローズティーはどれも絶品ですよ」

また上機嫌で神名に話してきた。

「本当に」

「そうですね。それでは」

「はい、それでお勧めは」

彼はそのローズティー、神名は誰と共に来ていたのかすぐにわかることを感じながらそれを飲むのであった。それは確かに美味だった。

だがそこには彼の心の味もした。忘れられない心の味をだ。それも感じながらそのうえで飲むのだった。

そしてそれからもだ。正大はデートを続けた。しかし彼が案内する場所は何処もだ。同じであった。

「ここはどうですか？」

「ここですか」

今は池にいた。そのボートを漕ぎながら二人でいた。彼はここでも言うのである。

「ここも長い間行っていませんでした」

「そうなんですか」

「どうしても。何か行くことが憚れてしまって」

顔がふと寂しいものになる。こうした話をする時はいつもであるがこの時であった。

「それで」

「そうなんですか」

また気付いても言わない神名だった。

「それでなんですか」

「そうです。けれど今こうして来まして」

「どうですか？今は」

「いいですね」

にこりと笑って神名に答えはした。

「本当に」

「そうですか、満足されていますね」

「十分に」

こう言いはする。神名も見ている。しかしだった。

言葉遣いは丁寧なままだ。まるで年上に対する様に。実際は二人は同じ歳である。神名は内心そのことも気になっていた。

だがそれについても言わずだ。やはり彼の言葉をそのまま聞くのであった。

「それで」

「それで？」

「ボートはいつもお一人で漕がれてたんですか？」

「漕ぐのは僕でした」

実際にそうだったというのである。

「そして」

「そしてですね」

「見てもらってますね」

彼はその名前は何故かここでは出さなかった。だがそれでもだ。神名にとってはそれで充分だった。それだけですぐにわかる、そして充分なものであった。

「それでいつもここにいました」

「思い出の場所でもあるんですね」

「はい、そうです」

正大はここでも上機嫌にだ。話すのだった。

「本当にここはとてども」

「そうなのですね」

「いい場所です」

思い出を振り返っていた。過去をだ。

第四章

「何度来ても」

「それならまた来ますか？」

「はい、二人で」

正大は笑顔で話した。

「来ましょう」

「わかりました、それならまた」

「他にも場所はありますが」

彼はその過去を見る目でまた話す。

「それでも。よかつたら」

「はい、それなら」

「行きましょう」

こうして様々な場所を二人で巡る。だが彼は常にそこには彼女を見ていた。実は彼女を見ていたのだ。神名もそれに気付いてはいた。しかしやはりそれは言わずにだ。ただ話を聞き共に行くだけだった。だがそうした場所を一通り行っただと思っただ時にだ。ふと彼に言うのであった。

「あの」

「はい？」

「今度ですけれど」

こう彼に話すのであった。

「いいですか？」

「何でしょうか」

「行きたい場所があります」

自分から言ってみせたのである。

「少し」

「行きたい場所ですか」

「はい、実はですね」

そしてだ。言う言葉はだ。

「御二人の場所に」

「御二人の？」

「はい、御二人のです」

こう彼に言うのである。

「そこに行きませんか」

「御二人というと」

正大はそう言われてもだ。首を傾げさせるだけであつた。一体どういったことなのか全くわからなかつたからだ。彼女が何を言っているかをである。

「それは一体」

「つまりです」

「はい、つまり」

ここで一旦一呼吸置いてからだつた。

「お家にお邪魔して宜しいですか？」

「僕の家」

「はい、それでいいでしょうか」

彼に対して尋ねる。

「一度お家に」

「わかりました」

正大はその言葉に頷いた。

「それじゃあ。家に来て下さい」

「いいですね、それで」

「はい」

正大は今は首を傾げさせずに素直に頷いた。

「それじゃあ」

「御願ひします」

こうしてであつた。神名は正大の家に来ることになった。彼からそれを聞いた両親はだ。まずは顔を見合わせてその上で話すのだつた。

「いいな」

「そうね」

まずはここからだつた。

「これは正大にとつてな」

「とてもね」

そしてだ。あらためて彼に言うのだった。

「是非来てもらえ」

「お家にね」

「それでいいんだね」

正大は両親の言葉にまずは問い返した。

「来てもらつても」

「ああ、いい」

「是非ね」

両親の返答は変わらない。

第五章

「それはな」

「是非来てもらって」

また話す二人だった。そうしてであった。

神名は正大の家に来た。彼の両親は彼女を笑顔で迎えた。そしてその顔を見てだ。

「これは」

「そうね」

「そっくりだな」

「だからなのね」

また顔を見合わせそのうえで話し合うのだった。

「だからか、あいつが自分から声をかけて」

「そうして交際してるのね」

二人は全てがわかった。彼女の顔を見てだ。

そのうえで二人で頷き合ってた。また話すのだった。

「これならな」

「きつとね」

「上手くいく」

「そうね」

そうしてであった。彼女を家に招き入れた。正大もいる。まずは一家揃って母親が作った御馳走を食べた。そのうえで団欒の話となつた。

「そうですか、本屋で働いているのですか」

「あの本屋ですか」

「はい、あのお店で、です」

笑顔で話す彼女だった。

「働かせてもらってます」

「それで正大と知り合ったと」

「そういう縁ですか」

「そうです。正大さんにはとてもよくしてもらっています。今度は神名から話した。」

「それで今も」

「わかりました。それで」

「あの場所に案内させてもらいますね」

「ここで、だった。両親は彼女にこう言ってきたのである。」

「それで宜しいですね」

「あそこで」

「あそこって？」

「しかしであつた。正大はだ。両親の言葉の意味がわからず目をしばたかせた。」

「何処のことなんだい？」

「御前も知つてる場所だよ」

「そこよ」

両親は息子の問いにはこう返した。

「そこに今から行くぞ」

「いいわね」

「何処なんだろう」

正大にはどうしてもわからないことだった。それで首を捻ってしまつていた。

だが二人は神名、そして彼をその場所に案内した。そこはだ。

仏壇だった。家の仏壇の前に連れて来たのである。そしてそこには一枚の写真が飾つてあつた。そこにいたのはとうとうだった。

神名がいた。紛れもなくだ。そこに笑顔でいたのである。

そしてそれを見た彼女はだ。真剣な顔で頷いた。無言でだ。

「えっ、まさか」

「やっぱり気付いてなかつたな」

「そうだったのね」

両親は驚いている我が子に対して言った。

「毎日手を合わせていても」

「肝心なことはね」

「何で。神名さんと姉さんが」

まさにであった。一緒の顔だったのだ。二人の顔は誰がどう見ても同じ顔であった。仏壇とその前にそれぞれいたのである。

彼は今やつと気付いた。そうしてだった。

「僕はまさか」

「そうだよ、無意識のうちにな」

「あんたは選んでたのよ」

両親はまた我が子に告げる。

「本当に気付いてなかったんだな」

「全くだったのね」

「まさか。神名さんは」

彼女は気付いていた。そうなのだった。

「そういうことだったんだ」

「やつと気付いたのか」

「全く」

両親はそんな我が子に今度は呆れた。

第六章

「そうしたことには何故気付かない」

「うっかり過ぎるわよ」

「けれど」

何しろ無意識のことである、これも仕方がなかった。彼にしてみればだ。

「本当にこんなことって」

「けれどな。この人はな」

「全部わかってくれてるのよ」

「全部って」

彼はそれを聞いてまた目をしばたかせた。

「わかってたって」

「御前のそうしたことにな」

「全部わかってたのよ」

また話す両親だった。

「それをな」

「もうね」

「わかってたって」

だがまだわかっていない正大だった。

「何が」

「だからな。見る」

「あの娘の顔を」

「顔……」

見るとだ。ここで彼もやっと気付いたのだった。

「まさか、僕は」

「これでわかったな」

「そうね」

両親は少し呆れた声になっていた。

「御前はずつとな」
「あの娘の影を見ていたのよ」
「姉さん……」
「やっとわかった彼だった。そうしてだ。
姉のその顔を見てだ。そうしての言葉だった。
僕、もう」
「ああ、いいな」
「そうしなさい」
「姉さんは追わない」
「こう言うのだった。」
「先に進むよ。もうね」
「先に、ですか」
手を合わせ終えた神名がだ。彼に顔を向けてきた。
「進まれるんですね」
「すみません、今まで気付いていませんでした」
「正大はまずは神名に対して頭を下げた。」
「けれどこれからは」
「気付かれたからですか」
「はい、先に進みます」
「そうするというのが。」
「これからは」
「一人ではなく、ですね」
「今度は神名からの言葉だった。」
「一人ではなく、ですね」
「はい、二人で」
彼の方からであった。言ったのだった。
「神名さんには失礼なことをしてしまいましたか」
「失礼ではないです」
「神名はそれは否定したのだった。」
「それは違います」

「違いますか」

「そうです。私はこう考えています」

そしてだ。神名は自分の考えを話すのであった。

「私と正大さんが御会いできたのはお姉さんのお導きだったのです」
「姉さんの」

「はい、お姉さんのです」

それによってというのである。

「それで御会いできて今もこうしてここにいるのだと思います」
「姉さんの、ですか」

「お姉さんをお慕いされてましたね」

また話す神名だった。

第七章

「とても」

「はい」

その質問にはだ。正大はこくりと頷いた。

「その通りです」

「お姉さんはきっと天国で正大さんを心配されて。それで
「神名さんを」

「そうだと思います。だからです」

こう話してであった。

「それで私と巡り合わせてくれたんだと思います」

「そうだな」

「あの娘も正大をいつも気にかけていたから」

両親もだ。ここまで話を聞いて言うのだった。

「そうだろうな」

「本当にね」

「そうなんだ」

正大は腕を組んでいた。そのうえで心から考えていた。

そうしてだ。また話すのであった。

「じゃあ僕は」

「先に進め」

「今言った通りね」

両親からの言葉だった。

「わかったな、もうな」

「追いかけてたりしないでね」

「うん」

正大も二人の言葉に頷いた。そうしてだった。

「わかったよ、先に進むよ」

「宜しく御願います」

神名は微笑んで言ってきた。

「これから」

「はい、御願います」

「正大もこう返した。」

「それじゃあ」76

「二人で先にですね」

「進みましょう」

「また二人で話す。」

「これからずっと」

「そうですね、二人で」

こうしてであった。正大は過去を振り切ることができた。そうしてだ。

それからすぐにであった。二人は結婚したのであった。

「えっ、学生結婚かよ」

「それかよ」

「うん、しかもね」

正大は驚く友人達にだ。笑顔で話すのであった。

「卒業してからの就職先も決まったしね」

「ああ、本屋さんか」

「そこか」

「奥さんの実家が実は大きな本屋さんでね」

「そこだというのである。」

「あの本屋に勤めているのはさ。親戚の言っならチェーン店らしくて」

「それであそこにいたのか」

「成程な」

「十店舗位あつてね」

「その店の数も話す。」

「そこに決まったよ」

「何かいいこと尽くめだな」

「全くだな」

友人達はここまで聞いてだ。そのうえでまた頷くのであった。

「結婚して就職も決まって」

「幸運が続くよな」

「前に進んだからかな」

正大はその理由について自分で話した。

「だからかな」

「前に進んだ？」

「それってどういうことだよ」

彼等にはわからない話だった。これは正大だけがわかることだった。

「それってよ」

「何なんだ？」

「ああ、こつちの話だから」

それは話さなかった。

「何でもないよ」

「ああ、そうか」

「ならいいけれどな」

「それでね」

そしてだ。彼はまた話した。

「今度だけれど」

「今度は何だよ」

「何があるんだよ」

「パパになるんだ」

にこにことして言ったのだった。

第八章

「実はね」

「パパっておい」

「子供もできたのかよ」

「もうかよ」

「そうなんだ、実はね」

こう皆に話す。

「いや、有り難いことにね」

「有り難いとかそういうレベルじゃねえだろ」

「何だよ、いきなりそれってよ」

「洒落にならないだろ」

「どんだけ幸せ来るんだよ」

皆今度はいささかむっとした顔を作って述べていた。

「ったくよ、盆と正月が一緒に来たっていうかな」

「そんな感じだよな」

「何でそんなに急に幸せなことばかり起こるんだよ」

「不幸の後には幸福、かな」

まずはこう述べた正大だった。心の中で姉の死のことが微かによぎったのは確かだ。そしてそれによって沈んでいた過去の自分もだ。

「あとはそれに」

「それに？」

「今度は何なんだよ」

「あれかな。前に進んだからかな」

これも個人的な理由だがそうではないかと思ったのである。

「それでかな」

「前に進んでか」

「それでかよ」

「それでじゃないかな」

自分のことを自分で分析している言葉だった。

「それで今こうして」

「前につて何だ？」

「何だよ、それ」

「吹っ切ったんだ」

詳しい内容は言わないがそれでも言ったのであった。

「ちよつとね」

「吹っ切った？」

「今度は何だよ」

「何を吹っ切ったんだよ」

「昔のことをね」

それだというのである。

「それをね。ちよつとね」

微笑んでの言葉であった。

「吹っ切ったんだ」

「何かわからないけれどそれでもか」

「吹っ切つて前に進んだのかよ」

「それでか」

「そうなんだ。そのせいかな」

こう自分で話すのであった。

「今こうして幸せになれたのかな」

「それでなれるのか」

「人間つてそれだけで幸せになれるのかね」

「どうかな」

「そついう場合もあるか？」

皆このことについては首を傾げさせる。確信は持てなかった。

だがそれでもだ。正大のその幸せそつな顔を見てであった。納得したことは確かだった。それで口々にこんなことも話すのであった。

「じゃあ俺達も前に向かうか」

「そつだよな。後ろ向いてばかりでも面白くないしな」

「しがらみがあつたら吹っ切つてな」

「そうするか」

「そうするといいいと思うよ」

最後まで微笑む正大だった。そして彼と神名の間には程なく女の子が生まれた。その顔は驚くまでに神名にそっくりであった。名前は二人でつけた。彼女とは違つ名前を。

姉を慕い

完

2010・6・9

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8932p/>

姉を慕い

2011年1月2日21時10分発行